

六月一五日（木）

ショッピングモールの出入口に近いコメダから出て、比較的賑やかなフードコートの前を右に曲がる。サーティーワンの甘い匂い、隣のジューススタンドの匂いもちよつと心魅かれる。さつきまでコメダでシロノワールと向き合ってたんだから、別腹も何もなさそうなんだけど。

スタバの手前にある久世福商店でも、「父の日フェア」と題して、お酒やツマミが並べられている。前を歩いていた浪川さんは歩みを止め、並べられているお酒を手を取った。

「父の日って、なあ〜んか節操ないよなあ」

「そうですか？ 母の日も、バレンタインも、割とそんな感じですけど」

イオンモールの中は、どこもかしこも「父の日」にかこつけて、食品から嗜好品からファッション雑貨、家具から家電まで売り付けようとしている。母の日もバレンタインもそれぞれ、「コレ」というコアはあるものの、節操のなさは大して変わらないような気がする。

「でも、母の日はカーネーション、バレンタインはチョコって一応あるだろ？」

父の日にネクタイとかお酒はまだ分かる気もするけど、甚平とか帽子とか、ただのシーズン先取り展開だろ？」

いつの間にか、当たり前のようにディスプレイされていて違和感を微塵も感じないが、そう言われればそんな気もする。とは言え、六月の中旬を過ぎて夏を先取り、つていうのもファッション的には売れ残りな気もする。

浪川さんは独りで色々眺め、商品を戻して前に進んだ。今度は左手のリカーシヨップの前で立ち止まる。

「父の日、なんかやるんですか？」

彼は店頭のディスプレイを眺めながら、「いや、何にも」と言った。

「オレがやらなくても、瑞希か晃がやるさ」 彼は僕の方を見て、「どうせ、君もやらないんだろう？」と言う。僕は返す言葉が思い付かず、言葉に詰まった。

「オレはただ、面白そうな酒が安かったら買おうと思つて、見てるだけ」

浪川さんは立ったり座ったりしながら、店頭に並べられたお酒やおつまみを一

つずつ入念に確かめていく。出先のお昼休憩とはいえ、のんびりアレコレ見過ぎではないかと心配になるぐらい、お店の中まで入って行って、隅々まで眺め倒している。

僕は腕時計に目を落とした。そろそろ戻らないと、午後の仕事が始まってしまおう。クラフトビールを見ていた浪川さんに声をかけた。

「おお、すまん、すまん」

彼はビールをいくつかピックアップして、レジに向かう。パパッと会計を済ませ、袋に詰めてもらってお店を出る。リカーショップの先にある出口から屋外駐車場に出て、彼が止めた車のところまで戻った。

先日乗ったのとは違う社用車の助手席に乗り込んだ。浪川さんはシートベルトを閉め、ルームミラーを確かめる。さっき買った荷物は、いつの間にか後部座席に置いてあった。

「大学じゃなくて、Eサイズさんのオフィス下でいいんだっけ？」

僕が頷くと、彼は「了解」と車を発進させる。今から千里中央へ戻る彼にとつては逆方向に送ってもらう。あつという間に着くはずだ。寝てしまわないよう、グツと力強く拳を握りしめた。

初出 令和三年六月二四日 ノベルアップ+にて公開